前田本『枕草子』のために（三）

金井利浩

〈キーワード〉二つの枕草子枕草子　前田本　諸本論　汎諸本論　再構成本

本稿は、前稿「前田本『枕草子』のために（二）」（本誌第三五号、二〇二二年三月発行）の続稿である。旧来の『枕草子』諸本論において不当に冷遇されてきたと思しい前田本の、該論の説くところとは背離・悖反する諸段を、前稿にひきつづき汎諸本論の視座から取りあげてゆく。

なお、前稿ではいわゆる「『正月一日は』の冊」所収の諸段を議論の対象に据えたが、本稿では、「『春はあけぼの』の冊」のうちのそれに向き合ってみたい

［凡例］

一、本文は、尊経閣叢刊丁卯歳配本『前田本枕草子』（育徳財団、一九二七年）に拠り、次のような方針によって翻刻する。

1　仮名は現在におこなわれる字体により、漢字は常用漢字表にあるものについてはその字体を使用する。

2　段落を切り、句読を加点する。

3　会話の箇所は「　」でくくり、会話文中の会話は『　』でくくる。

4　仮名には必要に応じて漢字を当て、もとの仮名は読み仮名（ふりがな）のかたちで残す。なお、その仮名が歴史的仮名遣いと相違する場合には、その仮名の直下に（　）でそれを補記する。

5　漢字には、必要に応じて読み仮名を［　］に入れて付す。また場合により、漢字を仮名に開き、もとの漢字を傍記する。

6　漢字が動詞の場合、適宜、送り仮名を補い、その仮名の右傍に圏点（「・」）を付す。

7　当て字の類は、一般におこなわれる表記に改め、もとの当て字はふりがなの位置に残す。

8　仮名遣いは歴史的仮名遣いに改め、底本のありようはふりがなの位置に残す。

9　語の清濁については、近年の研究成果を参照して、これを区別する。
10　反復記号「ゝ」「〳〵」は適宜仮名に改め、当該の記号はふりがなの位置に残す。
二、通釈は、本文の意味するところを現代日本語表現をもって示す。

九　前田本を読む／前田本で読む ～四四段前半部の場合～

まずは第四四段前半の本文(1)を見つめるところから始めてみたい。

〔四四〕（前半）

【本文】

木の花は、梅。まして紅梅は、濃きも淡きも、いとをかし。桜の、花びら大きに、花の色濃きが、枝は細く、葉はまれに咲きたる、藤の、花の色よく、しなひ長く咲きたる、いとめでたし。

卯の花は、品劣りて、何となけれど、咲くころのをかしう、郭公（ほととぎす）の陰に隠るらむと思ふに、いとをかし。祭の帰さに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白く咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白き単衣重ねて着たる、青朽葉などにかよひて、なほ、いとをかし。

四月つごもり・五月ついたちなどのころほひ、橘の、葉はいと濃く青きに、花のいと白う咲きたるに、雨降りたるつとめて

【通釈】

木の花といえば、梅。とりわけ紅梅は、濃いのでも淡いのでも、とてもよい。

桜の、花びらが大きくて、花の色の濃いのが、枝は細く、葉は少なくといったふうに咲いているのや、藤の、花の色がよく、しだれた花房が長く咲いているのは、ほんとうにすばらしい。

卯の花は、上品でなくて、別にどうという花ではないけれども、咲く時節がよく、ほととぎすが花の陰に隠れているのだろうと思うにつけ、とても心惹かれる。賀茂祭からの帰りがけに、紫野のあたりに近いみすぼらしい家々や、手入れもされていない垣根などに、たいそう白く咲いているのがよい。あたかも青色の表着の上に白い単衣を重ねて着たそのさまは、青朽葉の襲などを連想させて、やはり、とてもすばらしい。

四月の終わりから五月の初めといったころに、橘の、葉はたいそう濃く青いうえに、花がとても白く咲いているところに、雨の降った翌朝などは、この世にこれ以上のものがあろうかというくらいに風情の

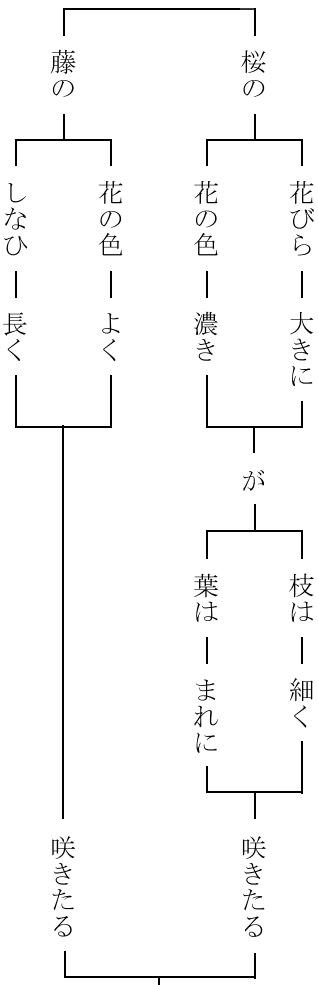
などは、世になう心あるさまをかし。花の中より黄金の鈴かと、いみじう際やかに見えたるなどは、朝露に濡れたる桜におとらず、郭公のよすがとさへ思へばにや、なほ、さらに言ふべきにあらず。

あるようすがよい。花の中から黄金の鈴かとばかりに、去年からふくらんできたその実が花のあわいに実にはっきりと見えているありようは、朝露に濡れた桜の花に劣るところなく、ほととぎすの身を寄せるところとまでも思うからであろうか、やはり、改めて言葉にするまでもないくらいすばらしい。

さて、本段は、三巻本〔三五〕、能因本〔四四〕、堺本〔七〕がこれに対応するが、三巻・堺の両本が、5～9行目の「卯の花は」に始まる一段を持たないという大いなる異同を抱えるほか、文体に差異を生ずるものもあり、小異については枚挙に遑が無い。以下、それらのうち主たるもの、特徴的なものを掲げる。

まず冒頭、「木の花は」のあとを、三巻本は「濃きも薄きも、紅梅。」、能因本は「梅の濃くも薄くも紅梅。」として、それぞれに一段を始発する。他方、堺本は、「濃きも淡きも」を「うすきもこきも」と表現する。

2行目、「桜の」は、卑見では、後置の「藤の」と対偶的に、「桜の、……たる、」「藤の、……たる」との構文を成して「いとめでたし」に収斂するものと捉える。すなわち、当該一文の構造を図式化すれば、次のとおりである。



これに対して三巻・堺両本がともに「桜は」とし、「藤の、花の色よく」については、三巻本が「藤の花は」、能因本が「藤は」と

する。また、三巻本は、「枝は細く、葉はまれに咲きたる」を、「枝ほそくて咲きたる」と、「葉」には触れることなく表現し、能因本は、「花の色濃きが」を「花の色よきが」、「葉はまれに」を「かれはれに」と伝える。「かれはれに」は意を通じないものと思しいが、堺本の「かれはに」もまた不詳である。つづく「藤」に係るところ、「藤の花は」と起ち上げる三巻本は、「しなひ長く色濃く咲きたる」と、「藤の花」と起こす能因本は、「しなひ長く、色よく咲きたる」と繋いでい、堺本は独り「藤は」と起こしたあとを「しなひ長く、色濃く咲きたる」と展じるのは三巻本と同断ながら、結びに至ってはまた、「いとをかしうめでたし」と独自、といった恰好なのだが、それらすべては、前田本がしかと伝え来たった対偶構造を理解しきれなかったばかりに恣意的な手を入れざるを得なかった、その結果なのではあるまいか。

また、5行目の「卯の花」のくだりについては、他本では能因本のみがこれを有すること前述したとおりだが、前田本とほぼ同文を伝えるなかで「単衣重ねて着たる」のところは「単衣襲（ひとへがさね）かづきたる」に作る。

さらに、うしろから5行目、「橘の」の直後、能因本は「葉はいと」を、堺本は「葉はいと濃く青きに、花の」を、それぞれ持たない。また堺本は、そのあとの「いと白う咲きたるに」を「いと白う咲きて」に作り、さらに、「世になう心あるさま」を「なべてならぬさま」と表現する。一方、三巻本は、「花のいと白う咲きたるが」との言回しで、「世になう心あるさまにをかし。」と結んでいる。なお、この「に」は、能因本も有する。

さて、うしろから4行目の「黄金の鈴」、他本はいずれもこれを「黄金の玉」と伝えている。既に指摘され来たったとおり、『和漢朗詠集』に「枝繋二金鈴一春雨後」（上・花橘・後中書王）との表現があり、これと同相と視れば、前田本が支持されるが、「玉」こそが『枕草子』プロパーの表現であって「鈴」は『和漢朗詠集』に引きずられた後人の手による恣意的な改変と見られなくもなく、先後優劣は俄かには決し得ない。ただし、先に触れた対偶的な表現構造を前田本のみが今日に伝え来たった点を重く視れば、ここも独り「鈴」を伝えたことを多とすべき余地は残されていよう。

ところで、うしろから3行目、「桜」に冠された形容表現の如何についてはなかなかに興味深いと言うべく、能因本は前田本と同断、三巻本は「朝露に濡れたる」のあとにさらに「朝ぼらけの」が置かれ、堺本は「春の」と、端的である。なお、「郭公のよすが」の「よすが」については、能因本だけが「よる」と伝えている。

さて、つづく後半部はどうであろうか。

一〇　前田本を読む／前田本で読む　～四四段後半部の場合～

〔四四〕（後半）

【本文】

梨の花。世にすさまじうあやしきものにして、目に近うもてなし、はかなう文つけなどだにせず。愛劣れたる人の顔などを見て喩ひに言ふも、げに、花の色よりはじめてあはひなく見ゆるを、唐土には限りなきものにして、詩にも作るなるを、さりともあるやうあらむと、せめて見れば、花びらの端にをかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃の帝の御使に会ひて泣きける顔に喩へて、「梨花一枝、春の雨に帯びたり」など言ひたるは、おぼろけならじと思ふに、なほ、いみじうめでたきことは類あらじ、とおぼえたり。

桐の花。紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉の広ごりたるさまこそ、うたてこちたけれ。されど、また、異木と等しうは言ふべきにあらず。唐土にことごとしき名つきたらむ鳥の、選りてこれにしもゐるらむ、いみじう心ことなり。まして、琴に作りて、さまざまなる音の出で来るなどはをかし。世の常に言ふべくやはある、いみじうこそめでたけれ。

木のさまぞ憎けれど、楝の、花こそいとをかしけれ。異木の花にはさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

【通釈】

梨の花。非常に興ざめで見苦しいものとして、すぐ目につくような扱いをすることもなければ、ちょっと手紙を結びつけるなどということさえもしない。可愛らしさに欠けている女性の顔などを見てはその喩えとして言うのも、いかにもと思われ、花の色をはじめとして何から何まで調和していないと見えるのだが、中国ではこの上なくすばらしいものとして、漢詩にも作るということなので、そうはいっても何かわけがあるのだろうと、強いて見てみると、花びらの端に美しい色つやが、ほんのりとついているようだ。楊貴妃が玄宗皇帝の使者に会って泣いた顔に喩えて、「梨花一枝、春の雨に帯びたり（梨花一枝が、春の雨に濡れている）」などと〔「長恨歌」で〕表現しているのは、並たいていではあるまいと思うにつけ、やはり、たいそうすばらしいことは他との比較を絶しているのだろう、と感じた次第である。

桐の花。紫色に咲いているのは、やはり趣があるものの、葉が広がっているようすとなると、なんともひどくうっとうしい。とはいえ、また、他の木々と同列には論ずべきではない。中国で大げさな名前がついている鳥〔鳳凰〕が、選んでこの木に特に棲むという、それはなんとも格別にすばらしい。ましてや、琴に作って、いろいろな音が出てくるなどというのはおもしろい。ありきたりの言い方で云々すべきではあるまい、実に優れているのだ。

木の外見は見苦しいけれど、楝の、花のほうはとてもよい。他の木々の花とは様子を異にして咲いて、〔「あふち」の名のとおりに〕必ず五月五日その日に咲き合うというのも素敵だ。

この後半部でも異同は多岐にわたるが、例によって主なもののみを掲げてゆく。

1行目。まず冒頭、「梨の花」を、堺本は「梨の木は」と起こす。三巻本は、「あやしき」を持たない。また、「目に近うもてなし」を「近くもてなさず」に作る。ちなみに、能因本は「もてなし」を有さず、堺本は「目に近うもてなし」全体を持たない。惟るに、前田本が「…もてなし」―「文つけなどだにせず」と、いわゆる対偶中止（連用中止）法をもって確（しか）と構える行文を、他本はいずれも伝えきれなかった、その結果がそれぞれの現態なのではあるまいか。前半部で確認した対偶表現のことが思い合わされるところである。

2行目の「はかなう」は、三巻本に「はかなき」とあって、事実上「文つけ」に掛かる体であり、いささか異なるニュアンスを形成する。また、「愛（あい）」は、他本いずれも「あいぎやう」。「愛敬」を当てる。あるいは前田本に誤脱あるか。

3行目。「花の色」は、三巻本が「葉の色」、能因本が「その色」に作り、堺本は「色」とのみ伝える。また、「あはひなく」を三巻本は「あいなく」、「…見ゆるを」を堺本は「…すさまじければ、ことはりにおもひしを」のごとくに表現し、独特である。

5行目。「あるやうあらむ」を三巻本は「やうあらむ」として、「ある」を持たない。

6～7行目の「泣きける顔」を、堺本が「なげきたるほどのにほひ」と、ここでも独自の表現を用い、「喩へて」を三巻・能因の両本が「似せて」と、別の動詞を用いる。

7行目。「春の雨に」は、三巻本では「春の雨を」、能因本では「春雨を」である。助詞は「に」ではなく「を」が正格であろうが、いまは仮に「に」のままに通釈を試みた。

ところで、8行目の「なほ」以下の一文について、文末の「おぼえたり」までを、堺本は「よろづのはなよりめでたし」に作る。本章段には、見来たったとおり堺本の独自異文が散見されるのだが、ここはその最たるものと言ってよいだろう。

うしろから8行目。「桐の花」を三巻本は「桐の木の花」として始発し、「をかしきを」の文節の助詞には、先とは逆の関係を形成するかのように、ここでは三巻本が「を」ではなく「に」を用いる。また、能因本は、「…うたてこちたけれ。されど」を、「…うたてあれども」と約めて表現する。

うしろから6～5行目。三巻本は「ことごとしき」を、堺本は「選りて」を、それぞれ持たない。また、「これにしも」の「しも」の位置に、三巻本は「のみ」を置く。

うしろから4行目の末尾、「…などはをかし。」を、三巻・能因の両本は、「…をかしなど」として次なる文節に直接せしめる。文のありようとしては、そちらが滑らかと言えようか。

うしろから3行目の「いみじうこそめでたけれ」を堺本は持たない。これもまた同本の独自異文である。

うしろから2行目、「異木の花にはさまことに咲きて」のところ、堺本は「異木の花には似ず、いとかれはにさきて」との表現を用い、三巻・能因の両本は、「異木の花には」を「かれがれに」に作る。

章段掉尾の「あふもをかし」の「あふも」を、堺本は「あふころ」とし、「をかし」を強調して「いとをかし」と結ぶ。最後まで同本は独自性を貫いて変わらない。

さて、主たる異同はざっと以上のとおりだが、同じ類纂本でありながら前田本と堺本とでかなりの径庭が存するさま、別けても、堺本が独り異なるさまを見てきた。それらは、旧説によっては説明しきれまい、というよりも、旧説をはっきりと峻拒するであろう。それにつけても、先に確認した、前田本のみが対偶中止の構えを伝え来たった事実を、改めて多としたい。三巻本の形姿は、いかにも意を以て改めたそれであろうし、能因本や堺本のそれは、対偶中止の構文そのものを認識し得なかったことによる恣意的改変の結果と見られよう。

前田本は、精査にも玩味にも堪え得る本文を私たちの目の前に示してくれているのである。

一一　前田本を読む／前田本で読む ～四五段前半部の場合～

つづいて第四五段も見てみよう。まずは前半部から。(2)

〔四五〕（前半）

【本文】

木は、桂。五葉。橘。柳。

そばの木は、しなき心地したれど、花の木ども散り果てて、お

【通釈】

木といえば、桂。五葉の松。橘。それに柳。

そばの木は、品のない雰囲気がただよっているけれども、花咲く木々がみな散って、一面の若葉になったなかで、時節もかまわず濃い紅

しなべたる緑になりたる中に、時も分かず濃き紅葉のつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、いとめづらし。

檀、さらにも言はず。

そのものとなけれど、寄生木といふ名、いとあはれなり。

榊は、臨時の祭、御神楽の折など、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の前のものと生ひはじめけむも、とりわきをかし。

楠の木は、木立多かる所にも、ことにまじらひ立てらず、おとろおどろしき思ひやりなどうとましきを、千枝に分かれて、恋する人のためしに言はれたるぞ、誰かは数を知りて言ひはじめけむと思ふに、をかしき。

檜の木、人のけ近からぬものなれど、三棟四棟の殿造りもをかし。五月に雨の声をまねぶらむも、いとをかし。

楓の木のささやかなる中に萌えいでたる葉末の赤みて、同じ方にさしひろごりたる葉のさま、花もいとものはかなげにて、虫などの涸れたるやうにて、をかし。

この世に近くも見え聞こえず、御嶽に詣でて帰りたる人などが持てまうで来める枝ざしなど、いと手触れにくげにあらあらしけれど、何の心ありて「あすはひの木」とつけけむ、あぢきなきかね言なりや。誰に頼めることと思ふに、知らまほしく、をかし。

葉がつやつやと、思いがけない青葉の中からさし出しているのは、とても目新しい。

檀、これは今さら言うまでもない。

固有の木を指すのではないけれど、寄生木の、ほかの木に寄生るというその名は、なんとも趣深い。

榊は、臨時の祭や十二月の御神楽の折にその枝を持って舞うなど、いかにもすばらしい。世の中に木々はたくさんあろうに、神の御前の木として生えはじめたというのも、とりわけ立派である。

楠の木は、多くの木が林立するところでも、めったに他の木と交じって立ってはいず、尋常でない大木への成長を想像するなど御免だが、数多くの枝に分かれていて、心を千々に乱す恋する人の喩えに詠われたのは、いったい誰が枝の数を千本まで数えてそのように言い始めたのだろうか、と思うのは、おもしろい。

檜の木、これは人の身近にはないものだけれど、(建築の良材ゆえに)「三棟、四棟とお邸を増やしてゆくよ」などと謡われたというのもおもしろい。また、五月には川風にそよぐ葉擦れが雨そっくりの音をさせるというのも、たいそう興味深い。

楓の木のこぢんまりとしたなかに萌え出た嫩葉の先が赤らんで、一方にだけ広がった葉のようすはそれとして、花ときたらいかにも頼りなげで、虫か何かの干涸らびたのに似て、おもしろい。

世間の身近なところでは目にも耳にもすることがなく、御嶽に参詣して戻る人などが持ってくるとも聞くその枝ぶりときたら、とても触れそうにないほどに荒々しいのだけれど、どういうつもりで「明日は檜の木」と名づけたのであろうか、なんの当ても甲斐もない予言であることよ。いったい誰に当てにさせたことかと思うにつけ、知りたく、興味がわく。

本章段は、「花の木ならぬは」に始まる、三巻本は〔三八〕、堺本は「八」が、また、「木は」に始まる能因本〔四七〕が、これに対応する。異同については、概して言えば、三巻本との間では小異ながらその箇所は多く、堺本本文との径庭には甚だしいものがある。ついては、ここでも、主たるところを取りあげてゆく。

1行目、「桂」から「柳」までを、三巻本は「楓。桂。五葉」、能因本は「桂。五葉。柳。橘」、堺本は「五葉。桂。柳」と伝える。同じ「花の木ならぬは」に始発しながら三巻本と堺本とが挙例を異にしている事実を、後の考察のために先ずは記憶にとどめておきたい。

2行目、「そばの木」を三巻本が「たそばの木」とするが、「た」は衍か。また、「おしなべたる」は、ここでは三巻本と堺本とが揃って「おしなべて」との、連用修飾の構えである。

3・4行目、「つやめきて」以下が、堺本では「つややかにて、青葉のさし出でたる」となって、文脈をだいぶ異にする。また、「いとめづらし」が、三巻・能因両本では「めづらし」のみ、堺本では「いとをかし」である。

5・6行目、堺本は、「檀」のあと、「さらにも言はず」から「いとあはれなり」までを持たず、直ちに「榊」につづく体である。なお、7行目の「臨時の祭」のあとに、三巻本と堺本は「の」を置く。前田本と能因本においては「臨時の祭」と並列する「御神楽」が、三巻・堺の両本では「臨時の祭」に包摂される関係になる。また、「神の前」の「前」のまえに、前田本以外はすべて「御」を置く。さらに能因本は、「生ひ」を「いひ」とする。

ところで、7～8行目の「世に木どもこそあれ」に始まる一文を、「木しもこそあれ」と始発する堺本は、その結尾を「とりわきをかし」ではなく、「もとよりわきてかしこし」に作る。独自異文である。

うしろから9行目の「いとをかし」、これを三巻本・堺本は「あはれなり」に作る。

同じく8行目、堺本は、「ささやかなる中に」の位置に「わかやかに」を配し、「赤みて」と「葉のさま」とを持たない。「葉」にまつわる情報が他本とは異なる、三たびの独自異文である。

後ろから5行目、三巻本と堺本の両本は、冒頭に「あすはひの木」との主語を置いて始発する。本段の構文の総体からすれば、そちらが自然であると言うべきか。なお、その主語が置かれれば、あとの「持てまうで来める」で読点ないし句点が打てようし、打つべきものとも考えるが、前田本（ないし能因本）においては「枝ざし」に掛かっていくものとみるほかあるまい。ところで、その修

飾句「持てまうで来める」だが、能因本は「しかもてありくめる」と表現し、三巻本は「まうで」を持たない。

うしろから4行目の「あらあらしけれど」は、三巻本では「あらくましけれど」、堺本では「あらましけれど」と伝え、伝写上の不安定さが想われる。

うしろから2行目、「誰に頼めることと」を堺本は「誰が頼めたるにかと」に作って主客を異にし、「知らまほしく」は、三巻本では「聞かまほしく」、堺本では「聞かまほしう」と伝えている。

さて、見来たったとおり、三巻・堺の両本が表現を同じうするところ両三箇所にとどまらず、と同時に、両本がそれぞれに前田本と表現を異にするところが散在し、前田本本文が能因本のそれに近しいこと歴然である。

ただし、前記したように、能因・前田の両本は、章段冒頭をともに「木は」と起こしながら、挙示された「橘」と「柳」とが逆位であり、また、掉尾の段落始発部に「あすはひの木」を置かぬことは同断ながら、「御嶽に詣でて帰りたるひと」の述部の表現が区々であるなど、前田本が能因本をさながら単純に引き写したのではないこともまた明白である。

つまるところ、ここでの前田本本文は、能因本とも堺本とも距離のあることをはっきりと指し示しているのである。

一二　前田本を読む／前田本で読む　～四五段後半部の場合～

〔四五〕（後半）

【本文】

ねずもちの木、人なみなみなるべきさまにはあらねど、葉のいみじうこまかにちひさきがをかしきなり。

あふすぢの木。花橘。山梨の木。

椎の木は、常磐にいづれもあるを、それしも、葉替へせぬためしに言はれたるも、をかし。

【通釈】

ねずもちの木、これは他の木と等し並みに扱うべきようすではないけれど、葉がたいそうこまやかで小さいところがよいのだ。

おうすじの木。花橘。梨の木。

椎の木は、常緑樹であればどれもが一年中その色を変えないであるのに、それだけが、葉の落ちかわらない例として歌に詠まれてきたというのも、おもしろい。

白樫などという木は、とりわけ深山に生える木の中でも縁遠くて、

白樫などいふものは、まいて深山木の中にもけどほくて、三位・二位の袍染むる折ばかりこそは葉をだにも人の見るめれ。めでたきこと、をかしきことにすべうもあらねど、いつともなく雪降りおきたるに見紛へられ、素戔嗚尊の出雲の国におはしましける御供にて人麿が詠みたる歌などを見るに、いみじくあはれなり。言ふことにても、折につけて一節あはれなりともをかしとも聞きおきつるものは、草・木・鳥・虫も、おろかにこそおぼえね。

ゆづり葉の、いみじうふさやぎ、つやめき、こはげなるに、思ひかけず、似るべくもあらぬ茎の、赤くきらきらしく見えたるこそ、いやしけれど、をかしけれ。なべての月のころはつゆも見えぬものなれど、十二月のつごもりにしも時めきて、亡き人びとの食ひ物にも敷くにや、とあはれなるに、また、齢を延ぶる歯固めの具にもして使ふ、いかなるにか、「紅葉せむ世や」といひたるも、頼もし。

柏木、いとをかし。葉守りの神のますらむも、いとをかし。また、兵衛督・佐・尉などいふも、をかし。

姿なけれど、棕櫚の木、唐めきて、わろき家のものとは見えず。

三位や二位の袍を染める折くらいに葉をだけなりと人が眼にするものようである。すばらしいこと、おもしろいことに位置づけるべくもないけれども、しばしば雪が降り置いたのに見まちがえられて、素戔嗚尊が出雲の国にお出ましになったお供として人麿が詠んだ歌「あしびきの山路も知らず白樫の枝にも葉にも雪の降れれば」などを見ると、たいそう心打たれる。また人の言うことについても、折々にほんのわずかでも感慨深く思えたり興味深く思えたりして耳に残ったものは、草や木でも、あるいは鳥や虫でも、おろそかには思えないものだ。

ゆずり葉の、たいそうふさふさと垂れて、つやつやと輝き、恐ろしげな葉に対し、意外にも、つりあいそうにもない茎が、赤くきらきらと光り輝いて見えたのは、品がないけれど、おもしろい。ふだんの月にはまったく姿を見せないのに、十二月にだけ時機を得て、亡き人びとの魂に供える食事の下に敷くのか、としみじみと心を動かされるのに、一方ではまた、寿命を延ばすおめでたい歯固めの食膳の飾りにもして用いる、どういうことであろうか、「旅人に宿かすが野のゆづる葉の紅葉せむ世や君を忘れむ」と歌に詠まれているのも、頼もしい。

柏木、これはとてもよい。葉を守る神さまが宿っていらっしゃるというのも、なんともすばらしい。また、兵衛督・佐・尉などを「柏木」というのも、おもしろい。

なんの趣もない形姿だけれど、棕櫚の木は、中国風で、身分の低い者の家に似合いのものとは思えない。

さて、後半部である[3]。異同だが、当然といえば当然のことながら、その状況は前半部と変わらない。すなわち、能因本に比して三巻・堺の両本と表現を異にする箇所が多くを数え、殊に堺本との間の異なりには際立つところがある。以下、例によって主たるもの

を掲げてゆく。

1行目、「人なみなみ…」の前に、堺本は「ひとびとしう」を置く。

3行目、「あふすぢ」は、他本はいずれも「あふち」である。前田本の「あふすぢ」は不明。あるいは「す」は衍か。また、「花橘」は、三巻本・堺本では「山橘」。これも、「山橘」が本来か。

4行目の「常磐に」は、三巻・堺の両本では「常磐木は」と伝える。

6～7行目、堺本は、「まいて」を持たず、「三位」と「二位」とが逆位である。

7行目、三巻本は、「見るめれ」を「見るめれば」として文脈を下接させ、「めでたきこと」と「をかしきこと」とが逆位である。並立する語句の転位が、このように三巻本と堺本それぞれに同様に認められる点、興味深い。また、「…すべう」は、他本いずれも「とり出づべく」であり、「いつともなく」は、三巻本では「いづくともなく」であり、堺本はこれを持たない。

10行目、「御供にて」は、三巻本は「御ことを思ひて」に作り、「見るに」は、三巻本では「思ふに」、堺本では「思ふには」である。堺本はさらに、「いみじく」の位置に「見て」を置く。

11行目、「言ふことにても」は、三巻本はこれを持たず、能因本は「いひこと」、堺本は「いふことにつけても」とする。また、堺本は「折につけて」を持たず、「あはれなりとも」が「あはれとも」、「聞きおきつる」が「ききおもへる」である。なお、「草・木」は、能因本・堺本では「草も木も」と伝える。

うしろから11行目、まず、「ゆづり葉」が能因本では「ゆづる葉」である。また、「ふさやき、つやめき、こはげなるに」のところ、「ふさやぎ」が三巻本・能因本では「ふさやかに」、「こはげなるに」が能因本では「いと青う清げなるに」であり、堺本はこの箇所総体を「つやつやめき、ふさやぎたるは、いとあをくきよげなるに」に作る。なお、三巻本は、「こはげなるに」から「茎の」までを、単に「茎は」とのみ伝える。

うしろから9行目、「いやしけれ」を三巻本は「あやしけれ」、「月のころは」を三巻本は「月には」、能因本・堺本は「月ごろは」とする。

うしろから7行目、堺本は、「敷くにや」を「しくをみるが」、「齢(よはひ)を延(の)ぶる」を「たとへなく、いはひのをり」と伝える。

うしろから6行目の「具にもして使ふ」は、三巻本・能因本では「具にももてつかひためるは」、堺本では「をりにもしきてつか

ひためるは」に作る。

うしろから4行目、堺本は、「葉守りの」を「はのいまだちひさきをりよりはもりの」、「いとをかし」を「かしこし」とする。

結尾の一文、「わろき」が三巻本では「わるき」、「ものとは」が堺本では「かどには」である。また、堺本は、前田本を含む他の伝本が「…とは見えず。」をもって閉じめとするのに対し、そのあとに、この位置で、「なにとなけれど、やどり木といふ名は、からだちていとをかし」の一文を置く。

総じて、右の最後の一事が象徴するとおり、前半部につづいて堺本の特異が顕著な章段である。然様な特異が奈辺に由来するものかも然りながら、それが、かつて山中悠希が主張したような、堺本の「再構成」[4]の結果であるにせよ、それにしては、たとえば「ゆづり葉」のくだりなどには語脈や文脈の乱れを生じているように思われ、該本本文には捉えがたさが残るように思われてならない。前田本がそのことを教え示してくれている。

一三　前田本を読む／前田本で読む　～四六段の場合～

〔四六〕

【本文】

草の花は、撫子。唐のさらなり、大和のも、いとめでたし。女郎花。桔梗。朝顔。菊。壺菫。刈萱。竜胆は、枝ざしなどむつかしげなれど、異花どもみな霜枯れたるに、いとはなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。

わざと取り立てて人めかすべうはあらぬ花のさまなれど、かまつかの花、らうたげなり。名ぞうたてある。

【通釈】

草の花といえば、撫子。唐のは言うまでもなく、大和のも、とてもすばらしい。

女郎花。桔梗。朝顔。菊。壺菫。それに刈萱。

竜胆は、枝ぶりなどがむさくるしいけれど、ほかの花々がみな霜に枯れてしまったなかに、たいそうはなやかな色どりで顔を覗かせたのは、とてもよい。

とくに取り立てて一人前に扱うほどではない花のようすだけれど、かまつかの花は、いかにも可憐である。ただその名ときたら不快だ。

岩菲の花は、「雁の来る花（雁来花）」と書物には書いてある。色は

がんぴの花、「雁の来る花」とぞ書には書いたる。色は濃からねど藤の花に似て、春秋と咲くがをかしきなり。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、言ひ続けたらむにをかしかりぬべき名を、花の姿、にくき実のありさまこそ、いとくちをしけれ。などて、さはた生ひ出でけむ。ぬかづきといふもののやうにだにあれかし。されどなほ、夕顔といふばかり、をかし。

しもつけの花。葦の花。

これに薄を入れぬ、いといみじうあやし、と言ふめり。秋の野の、おしなべたるをかしさは、薄こそあれ。穂先のいと濃き蘇枋にて、朝霧に濡れてうちなびきたるは、さばかりのものもやはある。秋の果てぞ、いと見所なき。いろいろにて乱れ咲きたりし花の、かたもなく散りにたる後、冬の末まで、頭のいと白くおほどれたるも知らず、昔おぼえ顔に風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいとよう似ためれ。よそふる心ありて、それをしもぞあはれと思ふべけれ。

唐葵は、花のさま、色あひ、とりわきても見えぬを、日の影にしたがひて傾くらむこそ、なべて草の心ともいふべくもあらず、いみじうあはれなれ。

濃くはないけれど藤の花のそれに似ていて、春と秋とに咲くのがよいのである。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、朝顔・夕顔と続けて言うぶんには間違いなくおもしろい名なのに、花のありさま、見苦しい実のようす、それらがなんとも残念だ。いったいどうして、あんなふうにまた生まれついたのであろうか。せめて酸漿とよばれるものくらいのようすではあってほしいことよ。それでもやはり、夕顔というその呼び名だけは、すばらしい。

しもつけの花。葦の花。

こうして草の花を挙げているなかに薄を入れないのは、なんともあまりにも不可解だ、という声が聞こえてきそうである。秋の野の、総合的な風情は、いかにも薄が際立っている。穂先がとても濃い蘇枋色で、朝霧に濡れて風になびいている風情といったら、ほかにそれほどのものなどあるだろうか。秋の終わりとなると、まったく見どころがない。さまざまな色どりで咲き乱れていた花が、あとかたもなく散ってしまった後、冬の終わりまで、頭がすでに真っ白でぼさぼさになってしまったのも気づかず、昔がしのばれるといった顔つきで風に揺れてふらふらと立っているのは、他ならぬ人間にとてもよく似ているようだ。このように一生をなぞらえる意識があって、人はきっと薄を感慨深いと思ってしまうに違いない。

唐葵は、花のようすといい、色どりといい、特別になど見えないけれど、日の光が移るのに従って花がそちらを向くというのは、およそ草の分別などという言葉では言い表しきれないほどに、なんとも趣深い。

本章段(5)は、三巻本〔六四〕、能因本〔七〇〕、そして堺本〔九〕がこれに対応し、異同は大小さまざま、かなりの数にのぼる。例に

よって、以下、その主だったところを取りあげてゆく。

1行目の末尾の「めでたし」が、堺本では「をかし」。

2行目、能因本は「朝顔」と「壺菫」を二つながら、堺本は「女郎花」を、それぞれ持たない。また、三巻本と堺本は、掉尾の「刈萱」を、「菊」の前に置く。さらに、能因本は、単に「菊」とせず、「菊のところどころうつろひたる」と指定する。

6行目の「花の」は、他本いずれもこれを持たない。

7行目の「…うたてある。」のあと、この位置に、先学は校注訳書の類いにおいて一様に、いかにも「かまつかの花」に係る事項であると断じた体で、三巻本では「かりのくる花とぞ文字には書きたる」、能因本では「かりのくる花と文字には書きたる」、堺本では「かりのくさ花とこそ、文字には書きたる」を置く。これは明らかに、前田本では次行の「がんぴの花」を説くくだりに対応する。してみれば、三巻・能因・堺の三本いずれもみな、いま引いた文節を、むしろ直後の「がんぴの花」に冠するそれとして把捉・理解すべきなのではあるまいか。ここは、そう問い得る料としての前田本の存在ないしそのありようを多とすべきであろう。

なお、と言うべきか、ただし、と言うべきか、「がんぴの花」は、三巻本では「かにひの花」、能因本では「かるひの花」である。(6)

10行目の「夕顔は」に始まるくだり、その直前に、いま引用は節するが、三巻本は「萩」に係る一節と「八重山吹」、能因本は「壺菫」と「菫」とに係る一節と「しもつけの花」をそれぞれに置く。

さて、10・11行目、堺本は「花のかたち」を「花のさま」、「花の姿、にくき」のところを「葉の姿ぞにくきや。」とする。一方、三巻本は、「言ひ続けたらむにをかしかりぬべき名を、花の姿」を「言ひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に」に作るが、いかが。ここの文脈に、前田本の有する「名を」を欠くことはできないのではあるまいか。

また、つづく「にくき実の」の「にくき」を、三巻本は持たず、能因本は「にくく」と、連用修飾句として置く。

13行目、「夕顔といふばかり」を、三巻本は「夕顔といふ名ばかりは」と表現する。前田本は、あるいは一文を、「されど、名を夕顔といふばかり、をかし。」と定めるべきか。

14行目、能因本は先に、「夕顔」のくだりの前に「しもつけの花」の掲出を済ませており、同花は当然ながらここには非在である。一方で、「葦の花」は単発ではなく、長口説がつづく。同本に直に就かれたい。

15行目、「入れぬ」を堺本は「入りぬ」とする。誤であろう。

16行目、「穂先のいと濃き蘇枋にて」は、三巻本・能因本では「穂先の蘇枋にいと濃きが」、堺本では「末いと濃く、蘇枋にて」とする。また、「朝霧」を、三巻本・能因本は「朝露」と伝える。

うしろから6行目、「おほどれたるも知らず」は、能因本に「おほきなをも知らで」とあるが、文意を捉えがたかろう。つづく「昔おぼえ顔」は、他本いずれも「昔思ひ出で顔」だが、語としての坐りのよさ、熟成度の高さは、前者が優っていよう。なお、「なびきて」に対して堺本は「なみより」の語を用いる。さらに堺本は、つづく後ろから4行目の、「…思ふべけれ。」との文末を、それをもって終止せずに「…思ふべけれど」とつづけ、「いざや。」で閉じる。一方、能因本は、「…思ふべけれ。」で閉じた後に、この位置で「萩」のくだりを置く。

さて、掉尾三行にわたる「唐葵」のくだりを、三巻本・堺本は持たない。というよりも、ここではなく、三巻本は「草は」にはじまる〔六三〕、堺本は「花なき草は」と始発する〔一〇〕それぞれの掉尾に置く。しかるに、「唐葵」が、単に名辞を挙げられるのみならず、その「花」のありようにまで言い及ぼされるのであってみれば、「(花なき)草は」の章段よりは「草の花は」のそれにこそ相応うであろうこと言うを俟たぬのであって、能因本・前田本がここに置くことの正当は担保されていると言ってよかろう。一方で、能因本はしかし、始発部の「花のさま、色あひ」を伝えず、結びの「…いふべくもあらず、いみじうあはれなれ」を「…おぼえでをかし」に作り、さらにその後に「山吹」「岩つつじ」「薔薇」に係るくだりを有する、いかにも独自の異文を展開する。

かく見来たってみると、少なくとも本章段に拠るかぎり、前田本は堺本にはおよそ似ていない。能因本とは近しいが、かなりかけ離れたところをも有する。それは、予てより説かれ来たった、前田本は能因本・堺本の両々を対照し、非共通部分は総て採用し、共通部分は一々判断して採択し稀に校訂を加えてできあがったとする、いわば想定された形成過程からは、決して生まれ得ぬ本文である、とは、ここに明記しておきたい。

さて、「草の花」について「花なき草」を主題とする次の〔四七〕では、そのあたり、いかがであろうか。引きつづき、つぶさに見つめてみよう。

一四　前田本を読む／前田本で読む ～四七段の場合～

〔四七〕

【本文】

草は、菖蒲。菰。葵、いとをかし。祭の折、神代よりしてさる挿頭となりけむ、いみじうめでたし。物のさまも、いとをかし。

沢瀉も、名のをかしきなり。心上がりしけむと思ふに。

三稜草。蛇床子。苔。雪間の青き草。木蚋。酢漿、綾の紋にてあるも、異よりはをかし。

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げに頼もしげなく、あはれなり。

いつまで草、生ふる所いとはかなく、あはれなり。岸の額よりもこれは崩れやすかりなむかし。まことの石灰などには生ひずやあるらむと思ふぞ、わろき。

ことなし草、思ふことをなすにやあらむ、と思ふも、をかし。

忍ぶ草、いとあはれなり。屋端さし出でたるものの端などに、あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。

芝、いとをかし。丸小菅。茅花、いとをかし。

浮草。青葛。八重葎。蓬、いみじうをかし。山菅。日陰蔓。木賊といふものの、風に吹かれたらむこそ、思ひやられてをかしけれ。

山藍。浜木綿。葛の、風に吹き乱されて、裏のいと白う見ゆるもをかし。浅茅原、をかし。

【通釈】

草といえば、菖蒲。菰。葵は、とてもみごとだ。賀茂祭に際して、神代の昔からずっと例の髪飾りになったというのは、ほんとうにすばらしい。その姿恰好も、たいそうすぐれている。

沢瀉も、その名が興味深いものである。「面高」に、すなわち傲慢にふるまったのだろうと思うので。

三稜草。蛇床子。苔。雪間に生える若い草。木蚋。酢漿は、綾織りの模様になっているのも、ほかのよりはしゃれた感じだ。

危う草は、崖のつき出たところに生えるというのも、いかにも頼りになりそうもなく、気の毒である。

いつまで草は、生える所がなんとも頼りなく、かわいそうだ。崖の出っぱりよりもこれは崩れやすいに違いなかろうよ。まともな白壁などには生えないのであろうよと思うと、感心しない。

ことなし草は、願いごとをかなえるのであろうか、と思うにつけても、おもしろい。

忍ぶ草は、たいそう心惹かれる。軒端から差し出た何かの先端などに、無理やりに生え出たようなようすは、なんとも興味深い。

芝、とてもよい。丸小菅。茅花、とてもよい。

浮草。青葛。八重葎。蓬、たいそうよい。山菅。日陰蔓。木賊といふ草の、風に吹かれたようすこそは、自然と想像されて興味深い。

山藍。浜木綿。葛が、風に吹き乱されて、裏葉が際だって白く見えるのも趣深い。浅茅の生える草原は、よい。

蓮の浮葉が、見るからに愛らしいようすで、おだやかに澄んでいる

蓮の浮葉の、いとらうたげにて、のどかに澄める池の面に、大きなる・小さきとひろごり漂ひてある、いとをかし。取りあげて、もの押しつけなどしてみるも。

池の水面に大きいの、小さいのと広がって漂っているのは、なんとも風情がある。その葉を取り上げて、何かを押しつけなどしてみるのもまた。

本章段は、三巻本〔六三〕、能因本〔六七〕、それに「花なき草は」にはじまる堺本〔一〇〕がこれに対応する。異同は大小多岐にわたるが、殊に、うしろから9行目の「芝、いとをかし。」以下は、諸本間に大きな径庭がある。ひとまずは、そこにいたるまでの範囲内で、主だったところを掲げておく。

まずは冒頭、右にも触れたとおり、「草は」を堺本は独り「花なき草は」と始発する。該本では前段の〔九〕が、「草の花は」とあったのに並置するものであることを意識した表現と言うべきか。その意味では、山中悠希が「再構成本」であると主唱した堺本の、その徴表的事象とも言えようか。

その堺本、1行目の「菰」を持たず、3行目の「沢瀉」については、「名のをかしきなり。心上がりしけむと思ふに。」を、「心あがりしたらむと思ふ名の、いとをかしきなり。」と、また、5行目の「あやふ草」についても、「岸の額に生ふらむも」を、「岸の額にねをはなれて」と、いずれも他本にはない特異な表現をもって評し、また描写する。

翻って、三巻本は、1行目の「祭の折」を持たず、5行目の「あやふ草」に係る評言、「頼もしげなく、あはれなり」を、「たのもしからず」に留める。

ところで、4行目、三巻本は「雪間の青き草」の「青き草」を「若草」とするくらいの異同にとどまるが、他の二本は挙例のありようを異にする。(7)

《能因本》三稜草。蛇床子。苔。こだに。雪間の青草。かたに。酢漿、綾の紋にてあるも、こともものよりはをかし。

《堺　本》三稜草。蛇床子。苔。こだに。日かげ。雪間の若草。酢漿は、綾の紋にあるもをかし。

ついでに言えば、見られるとおり、ここでは能因本と堺本との近似が感得されるのだが、のちの考察のために、「日かげ」が堺本ではここに位置していることを記憶にとどめておきたい。ちなみに、その「日かげ」、前田本では後ろから8行目の挙例中に置かれている。

12行目、「ことなし草」のくだり、「…と思ふも、をかし。」の後に、能因本は「また、あしきことをうしなふにやと、いづれもをかし。」との一文を有する。

次の13行目は「忍ぶ草」のくだり、「屋端」以下の一文については、こんどは逆に、三巻本に非在である。

さて、うしろから9行目、「芝、いとをかし。」以下の挙例やその順序、あるいは表現に係る一々をあげつらっての比校はおそらく煩瑣をきわめ、事を却って見えにくくしよう。諸本とも、そのままを引くことにする。

《三巻本》道芝、いとをかし。茅花もをかし。蓬、いみじうをかし。山菅。日かげ。山藍。浜木綿。葛。笹。青つづら。薺。苗。浅茅、いとをかし。

《能因本》蓬、いとをかし。茅花、いとをかし。浜茅の葉は、ましてをかし。まろ小菅。浮草。こま。あられ。笹。たかせ。浅茅。青つづら。／木賊といふものは、風に吹かれたらむ音こそいかならむと、思ひやられてをかしけれ。薺。ならしば、いとをかし。

《堺　本》道芝。茅花。蓬なども、いとをかし。山菅。山藍。浜木綿。葛。笹。青つづら。薺。苗。浅茅、いとをかし。

いかがであろうか。三巻本と堺本との近しさは歴然であろう。ただし、先に触れた、堺本ではすでに挙例されていた「日かげ」が、三巻本ではここに現出すること見られるとおりであり、それは、言を換えれば、なにゆえ「日かげ」のみに異同が生じたのかという、解くに解けぬ不可思議な一点を内包しつつ両本がこれだけの類同を見せつけているということである。留意しておきたい。また、前田本と能因本とが「木賊」を共有する点、近しさを思わせはするが、一方で、その前後の異同の甚だしきこともまた明らかであり、たとえば「葛」は、ここでは能因本に非在である。

ついで本文末尾の一段、「蓮の浮葉」のくだりだが、これについても諸本を引いてみたい。

《三巻本》蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華経のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠に貫き、念仏して往生極楽の縁とすればよ。また花なきころ、緑なる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。「翠扇紅」[8]とも詩に作りたるにこそ。

《能因本》蓮の浮き葉のいとらうたげにて、のどかに澄める池のおもてに、大きなると小さきと、ひろごりただよひてありく、いとをかし。取りあげてものおしつけなどして見るも、よもにいみじうをかし。八重葎。山菅。やまゐ。日蔭。浜木綿。

葦。／葛の、風に吹きかへされて、裏のいと白く見ゆるもをかし。

《堺　本》蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠に貫き、念仏して往生極楽の縁とすればよ。また花なきころ、緑なる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。「翠扇紅」とも詩に作りたるにこそ。

もはや贅言を要すまい。三巻本と堺本との同類近似は、前段〔四六〕で触れたとおり、能因本・前田本では「草の花は」の章段に位置していた「唐葵」を、両本がともに、実はこの「（花なき）草は」の章段の、右にひいた「蓮葉」のくだりのあとに位置せしめていることも含め、明々白々であり、前田本の能因本との近接と離反――能因本では、ついに「葛」をもって章段が閉じられるのである――もまた、ここに改めて思わされるところである。

かく閲してくると、畢竟、〔四六〕に対して述べたのと同然の判断を下さざるを得ない。すなわち、本章段の本文もまた、前田本は能因本・堺本の両々を対照し、非共通部分は総て採用し、共通部分は一々判断して採択し稀に校訂を加えてできあがったとする、想定上のでしかない形成過程からは、断じて生まれ得なかったであろう、と考量するほかないのである。

一五　前田本を読む／前田本で読む　～四八段の場合～

〔四八〕

【本文】

鳥は、川千鳥。友まどはすらむこそ。川のうへ、とほく聞こえたる、ものあはれなり。雁の声は、遥かなる、いとあはれなり。近きは、わろき。鴨は、羽の霜うち払ふらむと思ふに、をかし。

鶯は、世になくさま・かたちも声もをかしきものの、夏秋の末まで同じ声に鳴きたると、内裏の内に棲まぬぞ、いとわろき。

【通釈】

鳥といえば、川千鳥。友を惑わせるという。その声が川の上をわたり、遠くから聞こえてくるのは、いかにも趣深い。雁の声は、遥か彼方から聞こえてくるのが、実に心に沁みる。近くに聞こえるのは、よくない。鴨は、羽に降りた霜を真剣に払うかと思うと、興味深い。

鶯は、この上なく姿・顔だちも声もよいものだけれども、夏を経て秋の末まで同じ声で鳴いているのと、御所のうちに棲まないのとは、なんとも感心しない。また、夜鳴かないところをみると、眠たがり屋に違いなく思われる。十年ほど宮中にお仕えして耳を澄ましていたけ

また、夜鳴かぬこそ、寝ぎたなくおぼゆれ。十年ばかり内にさぶらひて聞きしかど、さらに音もせざりき。さるは、竹もいと近く、通ひぬべき枝のたよりもありかし。まかり出でて聞けば、あやしの家にも、梅のなどには、はなやかにぞ鳴き出でたるや。郭公は、あさましう待たれて、夜うち待ち出でられたる心ばへこそ、いみじうめでたけれ。六月などにはまことに音もせぬが。雀などのやうにあるものならば、鶯もさしもおぼゆまじ。春の鳥とたちかへるより待たるるものなれば、なほ思はずなるはくちをし。人げなき人をば知る人やはある。鳥のなかにも烏・鳶などの声をば、耳に聞き入れずかし。鶯は、文などに作りたれど、心ゆかぬ心地す。

異所なれど、鸚鵡、いといとあはれなり。水鶏。鳴。水鳥。雲雀。ひわ。ひたき。都鳥。鶏の雛。

山鳥、友を恋ひて鳴くに鏡を見せたれば、慰むらむ、心若く、あはれなり。谷隔てたるほどなど、いと心苦し。

鶴は、こちたきさまなれど、鳴く声の雲居まで聞こゆらむ、いとめでたし。頭赤き雀。たくみ鳥。斑鳩の雄鳥。

鷺は、いとみめも見苦し。まなこゐなどもうたて、よろづになつかしからねど、「ゆるぎの森にひとりは寝じ」とあらそふらむこそをかしけれ。

鴛鴦、いとあはれなり。かたみにゐかはりつつ、羽の上の霜をはらふらむなどをかし。はこ鳥。

れど、いっこうに鳴きもしなかった。その実、竹もすぐ近くにあり、いかにも通ってきそうな恰好の場所としての枝もあったのだ。宮中から退出して耳を傾けると、みすぼらしい人家でも、梅の枝などでは、はなばなしく鳴き立てていたことよ。かのほととぎすは、あきれるほど過度に待たれながら、夜を待ちかまえるようにして期待どおりに鳴き出すその心づかいは、ほんとうに立派である。六月にはぴたりと声一つもしないのがまた——。雀などのようにいつでも鳴いている存在ならば、鶯もそこまで悪くは感じないに相違ない。ただ春の鳥として年が改まるなりその鳴き声が待たれるものであるから、やはりどうしても期待外れになるのは残念である。いったい人並みでない人間を意識的に分かろうとする人はいない。それと同様に鳥のなかでも烏や鳶などの声には、まともに聞き耳を立てたりはしないことよ。その意味でいえば鶯は、漢詩文などに詠み込まれているけれど、それだけに不満の残る感じがする。

異国のものであるけれど、鸚鵡は、とてもとても情趣がある。水鶏。鳴。水鳥。雲雀。ひわ。ひたき。都鳥。鶏の雛。

山鳥は、友を恋しがって鳴く際に鏡を見せると、その映った姿を友と思って気持ちを晴らすという、それが純情で、いじらしい。雌雄が谷を隔てている夜間などは、だからとても気の毒だ。

鶴は、仰々しいようすであるけれども、鳴く声が空の彼方まで聞こえるというのが、実にすばらしい。頭の赤い雀。たくみ鳥。斑鳩の雄鳥。

鷺は、たいそう見た感じも劣っている。目つきなどもいやで、どこをとっても親しみにくいけれど、「ゆるぎの森にひとりは寝じ」と妻争いをするというのはおもしろい。

鴛鴦は、とてもしみじみとした感じがする。たがいに位置をかわりながら、羽の上の霜を払うとかいうところなど風情がある。はこ鳥。

旧説への肯んじなさが確認された前段・前々段であったが、さて、本章段[9]はどのような様相を見せるであろうか、と問うや、冒頭から前田本の独自異文に出会わされることになる。すなわち、対応する三巻本〔三九〕の始発は「鳥は　ことどころのものなれど、鸚鵡、いとあはれなり。」、能因本〔四八〕のそれ「鳥は　ことどころの物なれど、鸚鵡は、いとあれはなり。」と、ほぼ同文をもって伝え、堺本〔一一〕は「鳥は、ほかの鳥なれど、鸚鵡いとをかし。」と、三巻・能因の両本とはやや表現を異にしながらも、やはり「鸚鵡」を筆頭に据えて起筆するのであって、つまるところ前田本だけが「川千鳥」を劈頭に掲げて章段を展(ひら)いてゆくのである。

いや、開扉部に限らない。一段全体にわたって鳥たちの登場する順序、それぞれの鳥に係る評価事項、いずれも出入りは甚だしく、いまそれらの一々を詳らかにすればするほど、差異・異同は却って見えにくくなるであろう。是非、各伝本には就いて見られたい。

翻って、ここで一つ二つのことにとどまってみる。先ず考量してみたいのは、「ほととぎす」に係る記述についてである。

はじめに留意したいのは、前田本以外の三伝本が、いずれも「鸚鵡」のあとに「ほととぎす」を挙げる本文を伝えている点である。外来の「鸚鵡」を別格として除けば「ほととぎす」が筆頭であるとする価値基準がそこに作動していたとして、それ自体に違和を覚えるものではないのだが、如何かとやや訝しく思われるのは、後段の「鶯」のくだりに「ほととぎす」が登場してしまうことである。尤も、登場するとはいえ「鶯」に係る文脈において引き合いに出されたにとどまると見れば、能因・堺の二本については、訝しむには及ばないとの立場も取るには取れよう。しかるに、当該章段の掉尾を飾るかのように独立したくだりを構え、その記述量も少なくない三巻本においては、重複の感は、やはり否めまい。

加うるに、そのくだりが、「なほ、さらに言ふべきかたなし。」と始まり、「すべて言ふもおろかなり。」と終わる表現のありようを目にするに及んで、私たちはそれをどう受けとめたものだろうか。

冒頭で端的に措定されていたものが改めて一定の筆量をもって記述されてしまうことの違和、それがあろうことか、いかにも付けたりといった謙退の表現をもって枠取られるときに生じる違和、そうした二つの違和を抱えこむ構造体は、もはや破綻しているとしか評しようがないのではあるまいか。

さらに駄目を押せば、その直後に続くのが、「夜鳴くもの、なにもなにもめでたし。ちごどものみぞ、さしもなき。」との記述なのだ。そこに芬々として漂う、悪しき意味での枕草子らしさの装いとでもいうべきものを、私たちはどう扱ったものであろうか。

畢竟、少なくとも本章段に関するかぎり、三巻本的なる本文が原姿であったと看るのは、いささか窮屈であろう。むしろ、能因本的ないし前田本的なる本文が増益されたその結果が三巻本的なる本文である、そう看るのが、事の経緯の順当というものだろう。さらに臆測が許されるとすれば、能因本的ないし前田本的なる本文に「ほととぎす」の記述の無いことを訝しんだ後人が、そこに、いかにもの表現を以て賢しらな増補を私した、そのような事態の介在が疑われてもくるように思うのだが、いかがであろうか。

ところで、いま、「能因本的ないし前田本的なる本文」との言表を用いた。前田本本文からの距離が、三巻・堺の両本においては遠く、能因本において近しいゆえの便宜であったが、厳密を期せば、それは正しい括り方ではない。そもそも右でも触れたとおり、前田本において挙例された鳥の第一は「鸚鵡」でなかったし、第二に「ほととぎす」が配置されることもなかった。さらに引証を加えれば、三巻本・堺本が「都鳥（みやこどり）」を配する位置に能因本が置くのは「みこ鳥」であり、「みこ鳥」を挙げながらその一方で、前田本が「宮こどり」と置いた位置に「都鳥」を配するのが能因本なのであったし、前田本のみが有し伝える「ひばり」を、三巻本・堺本と同様に伝えることがなかったのもまた能因本なのであった。

かく見来たってみれば、本章段もまた、旧来の、前田本は能因本と堺本とを底本として集成して作られた改修本であるとする定見とは無縁であり、そうした見立てによってはおよそ説明し尽くせぬ本文を擁している、というほかないのである。

さてまた、もう一つ意を留めておきたいのが、本文9行目の「鳥（とり）のなかにも烏（からす）・鳶（とび）などの声（こゑ）をば、耳（みみ）に聞（き）き入（い）れずかし。」との一文である。これが「声」をめぐる文脈のなかに置かれていたことを確認したうえで、他本のありようを列挙してみたい。

《三巻本》鳶・烏などのうへは見入れ、聞き入れなどする人、世になしかし。

《能因本》鳥の中に烏・鳶などの声をば見聞き入るる人やはある。

《堺　本》鳥の中にも、鳶・烏のことをば、見入れ聞き入るる人もなし。

いかがであろうか。

ゆらい「鶯」の、他ならぬ「声」に発した文脈にあったればこそ「うへ」や「こと」へと置き換えることなく「声」に執し、「声」に執するからにはそれと呼応せぬ「見入る」など断じて導き入れぬ、そうした繊細な表現へのこだわりによって調えられた本文を現に示した前田本をこそ「再構成本」と呼びたいし、呼ぶべきである、というのが本稿の立場である。

さて、最後に、もう一つ。いま右にひいた「鳥のなかにも…」の直前の一文は、こうであった。

人げなき人をば知る人やはある。

これについても、他本のありようを並記してみよう。

《三巻本》人をも、人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをばそしりやはする。

《能因本》人げなき人をばそしる人やはある。

《堺　本》人をも人げなく、世のおぼえあなづらはしくもなりそめにたるをば、そしりやはする。

見られるとおりである。傍線部に徴して、右の「知る」はそう定めるべきではなく、むしろ「そしる」の「そ」の誤脱とみて、「そ」を補って「そしる」へと復し、結果的に能因本と同一の本文を前田本も立てるべきなのであろうか。いや、そこに瑕疵を含む恐れありつつも、それが前田本が原姿性をとどめることの証ではあるまいか、もしくは、その独自異文こそが、前田本の示した再構成ないし再編集後の形姿ではあるまいか、と述べるとしたら、それこそ前田本への恣意的ないし不当な肩入れである、といった誹りを蒙るのであろうか。

一六　前田本を読む／前田本で読む　～五三段の場合～

〔五三〕

【本文】

仏は、如意輪。人をわたしかねたまひて、つらづゑつきて歎きたまふがいとかたじけなく、あはれなるなり。千手観音。すべて六観音。

薬師仏。弥勒。降三世は、眉目はおそろしげにおはすれど、御誓の頼もし立てたるも、いとつきづきしかめり。

釈迦仏。不動。文殊。地蔵菩薩。

【通釈】

仏といえば、如意輪観世音。人びとを彼岸へと渡しなさろうとして渡しかねなさって、頬杖をついて悲嘆していらっしゃるのが何とももったいなく、胸にしみるのである。千手観音。それらを合わせた六観音。

薬師瑠璃光如来。弥勒菩薩。降三世明王は顔つきはこわそうでいらっしゃるけれど、ご誓願の依頼を立ててあるのは、いかにも似つかわしいように見える。

釈迦牟尼如来。不動明王。文殊菩薩。地蔵菩薩。

本章段[10]は、三巻本〔一九九〕、能因本〔一九四〕、堺本〔三八〕がこれに対応するが、1行目の「如意輪」につづく一文、4行目の「降三世」以下の一文ともに三巻本が持たぬほか、各仏の序列をはじめとして径庭は甚だしく、短小章段ながら忽(ゆるが)せにできない様相を孕む。各伝本のありようを掲げてみる。

《三巻本》仏は　如意輪。千手、すべて六観音。薬師仏。釈迦仏。弥勒。地蔵。文殊。不動尊。普賢。

《能因本》仏は　如意輪は、人の心をおぼしわづらひて、つらづゑつきておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手、すべて六観音。不動尊。薬師仏。釈迦。弥勒。普賢。地蔵。文殊。

《堺　本》仏は、薬師。如意輪の人をわたしわづらひて、つらづゑつきて歎きたまへる、いとあはれにかたじけなし。地蔵。降三世、眉目こそおそろしげにをはすれど、御誓ひいとあはれにたのもし。陀羅尼も、いとつきづきしかんめり。

これまで幾度も触れてきたとおり、つとに定見と位置づけられてきた旧説によれば、前田本とは、能因本（の源流本）と堺本（の源流本）という二種の底本全部を解体し、対照し、共通しない部分は全部採用し、共通する所は一々判断して採択し稀に校訂を加えてできあがったものであった。

いま、改めて能因・堺・前田三本の本文を見つめられたい。一見、旧説をいかにもと思わせるようでいて、その実、いかに旧説を突き放すありようを見せつけていることか。すなわち、「如意輪」に係る記述もさりながら、その前後に挙例された仏たちの種類と順序とにおける区々たるありようそのものが、旧説の不当不備を雄弁に物語っているのである。その事実を、ここにしかと見届けておきたい。

［注］

（1）　本文うしろから6行目、「四月つごもり・五月ついたち」は、底本の本行本文に「四月○ついたち」とあって、その補入符「○」の右傍に「つこもり五月」と小書きするのに従った。

（2）　本文11～12行目の「言ひはじめけむと思ふに」の「に」は、「も」を見セ消チにして「に」（字母「耳」）と小書きされたのに従った。ただし、この「に」は「そ」（字母「曽」）とも判読し得る字形であり、現に『新註』はそのように注しているが、いまは意にも鑑みて、「に」と判じた。

また、13行目の「人の」の「人」は、底本がその上の「き」と下の「の」との間に補入記号「○」を加え、その右傍に小書きしてあるのに従った。

（3）本文8行目の「いつともなく」は、底本が「いつとなく」の「と」と「な」との間に補入記号「○」を記し、その右傍に「も」を小書きしてあるのに従った。また、うしろから5行目の「頼もし」は、底本「たのもしき」の「き」を見セ消チにするのに従った。

（4）山中は、堺本が類纂にとどまらぬ、堺本による堺本のための本文を形成していることを根拠に、同本を「再構成本」と認称すべきであると説いた（『堺本枕草子の研究』武蔵野書院、二〇一六年）。

ちなみに、拙稿「『枕草子』を前田本で読むということ」（中央大学附属中学校・高等学校『教育・研究』第三三号、二〇二〇年三月発行）で述べたとおり、山中の伝に拠ってよければ前田本もまた前田本としての本文を形成しており、紛れもなく「再構成本」と呼べるであろうし、呼ぶべきである、というのが本稿の立場である。

（5）本文うしろから8行目の「秋の果てぞ」は、底本が「秋のはなそ」の「な」を見セ消チにして、その右傍に「て」を小書きするのに従った。また、うしろから3行目の「唐葵は、…とりわきても見えぬを」の「見えぬを」は、底本が「みえからぬを」の「から」を見セ消チにするのに従ったものだが、ここはおそらく、「からあふひは…みえ」までを筆写した書写者が、書本に目を遣ったのち、ふたたび「から（あ…）」と書きはじめて誤りに気づき、直ちにその2字を消して「ぬを」と書き継いだのであろう。

（6）三巻本の「かにひの花」、能因本の「かるひの花」、前田本・堺本の「かむひの花」の関係をどう見たものだろうか。たとえば、後に、

わたつ海の沖なかに火の離れ出でて燃ゆと見ゆるは海人の漁り火　（古今和歌六帖・第六帖・かにひ）

わたつ海の沖なかに火の離れ出でて燃ゆと見ゆるは海人の漁りか　（拾遺和歌集・巻七・物名「かにひの花」・三五八）

と、歌の形姿を少しく転訛させてそれぞれの歌集に収載されることになる、清女よりも前の時代を生きた歌人伊勢が宇多院歌合において右方として提出した、

わたつみの沖なかに火の離れ出でて燃ゆと見ゆるは天つ星かも

という一首の兼題「かにひのはな」が、こんにち、「雁靡花」との漢字表記を以て伝わっていることに鑑みれば、「かにひ」→kanibi→kanbiといった音転をたどり、それが「かむひ」と表記されて、やがてganpiとの読みを生成するに至り、「雁皮」「雁緋」「雁靡」などと記され解されることになったものだろうか。あるいは、まったく逆に、たとえば田中重太郎『校注枕冊子』が「岩菲（がんぴ）の転かという」と注したように、ganpiとの呼称が先におこなわれていたとすれば、そこに「雁皮」「雁緋」「雁靡」といった漢字が当てられ、それが「かりひ」との仮名表記に転化し、「り」が「に」（字母「耳」）や「る」（同「留」）といった誤写を生み、「かにひ」「かるひ」に至ったものであろうか。

ちなみに、長谷川幸子「枕草子『かにひの花』考」（『東洋女子短期大学紀要』24号、一九九二年三月）は、ナデシコ科センノウ属ガンピが「かにひの花」であると説いている。就いて読まれたい。

（7）　以下、三巻本の本文ならびに章段番号は田中重太郎『校注 枕冊子』（笠間書院、一九七五年）に、能因本のそれは田中重太郎『枕冊子全注釈 一・四』（角川書店、一九七二・一九八三年）に拠る。また、堺本の本文は、吉田幸一編『堺本枕草子 斑山文庫本』古典文庫、一九九六年 に拠り、私に句読を加点し、適宜、仮名に漢字を当て、また仮名を歴史的仮名遣いに改めるなど一般的な校訂を施して掲出する。ただし、章段番号は林和比古編著『堺本枕草子本文集成』（私家版、一九八八年）に拠る。

（8）　引用底本は「翠翁紅」に作るが、矢作武「枕草子の源泉　中国文学」（『枕草子講座 第四巻』有精堂、一九七五年）が説いたとおり、『和漢朗詠集』所収の許渾の詩の一節「煙開翠扇清風暁　水泛紅衣白露秋」（煙は翠扇を開く清風の暁　水は紅衣を泛ぶ白露の秋）をふまえたものと見て、いま改めた。

（9）　本文1行目、「うへ」の「う」は、底本に「こゑ」とある、すなわち「う」とも「こ」とも判読し得る一字の右傍に付された定めの小書き「う」に従った。10行目の「梅のなどには」の「などには」は、底本「なかとには」に見えるが、いま、『新註』が「『か』ミセケチのやうである」と注するのに従う。ただし、『新註』は、おそらく意を以て改めたのであろう、本文を「梅の木などには」と立てるが、失当であろう。ここでの「梅のなどには」の「の」は、いわゆる準体用法のそれであって、上の「枝」を承けており、前田本本文をそのままに読み得よう。

12行目、「六月などには」は、底本が「六月はかりには」の「はかり」を見セ消チにし、右傍に「なと」と小書きするのに従った。

うしろから10行目の「…。ひたき。都鳥。鶏の雛。／山鳥、友を恋ひて…」は、底本が「…ひたき／○ともをこひて…」と、「とも」の前に補入記号「○」を追補し、その右傍に「宮ことり にはとりのひな 山とり」と小書きするのに従った。

同じく9行目の「心若く」は、底本が「心のわかく」の「の」を見セ消チにするのに従った。

（10）　本文1行目の「…歎きたまふがいとかたじけなく…」の「いと」は、底本が「…なけ／き給か○かたしけなく…」と、「か」と「か」との間に補入記号「○」を追補し、その右傍に「いと」と小書きするのに従った。

なお、うしろから2行目の「御誓の頼もし」につづく「立てたるも」を、堺本に拠って「たらに（陀羅尼）も」に改める説が行なわれている（『新註』）が、いま、それには従わずとも前田本のままで文意は通るであろう。